

## 8.5 真夏の夜の“キョウエン”

( 断章“ノコギリヤネのある風景” 番外編 )



▲ 「1000年生きた私—環世界の中で」(制作者：宮森敬子)

昨年の夏、国際芸術祭「あいち 2022」の会場となったのこぎり二で、アートスペースの mhproject では、9月3日、夏の終わりを彩るサウンドパフォーマンスの祝祭が催された。

それから1年、今夏の mhproject では、「1000年生きた私—環世界のなかで」と題する展示が開催されている。アーティストの宮森敬子さんは、この地域をリサーチし、戦後の一宮市の焼け野原に残った一本のイチイガシの大樹に着想を得て、現場で作品の制作に着手した。

「環世界」とは、エストニアの動物学者ユクスキュルが1934年に提唱した概念であり、生物が独自の知覚と行動でつくる世界を意味する。生物多様性の重要性が認識される中、作品は、私たち自身、そして人間の存在に問いかけるものとなっている。

そこに、今年も一人のパフォーマンス・アーティスト(中村愛音さん)が招かれ、8月5日、真夏の夜の“キョウエン”の運びとなった。

その“マレビト”は白装束を身に纏って降臨した。そして、そのパフォーマンスとは…

のこぎり二に棲むオニと一緒に振り返ってみよう。

ノコギリアン(神奈川県藤沢市在住/のこぎり二にノコギリアン・コウバを主宰)

## 1. “からっぽ”の中の“からっぽ”

マレビトは、ゆっくりとした足取りでのこぎり二のメイン展示スペースに登場した。緩やかな時間が流れ始める。薄い短冊状の和紙で覆われた仮面を装着しており、それが僅かな空気の流れにふわりと揺れる。そして、たおやかな手の動きを交えながら壁伝いに奥に進んでいく。緊張感が漂い、私たちはじっと見入っている。立ち止まることはあっても、後戻りすることはない。ゆっくりと、流れるように歩を進める。

この展示空間の大きさは、100㎡程であるが、大きな“からっぽ”である。創造力の原泉である一方、ここで展示をする者は、この空間に対峙する覚悟が要求される。さて、今夜のアーティストは、ここにどのような「場」を創るのだろうか。

上から見ていて気づいたことがある。移動の軌跡だ。それは、ほぼ円弧を描いていた。中央には踏み込まない。まるで、真ん中に“からっぽ”を造り、それと対話するかのよう。お前たちの視線は、一挙手一投足を追っかける。手で指し示す先を見る。顔を上げれば、その先を追う。そうして、時間を掛けながら、お前たちは、この“からっぽ”の器そのものを隅から隅までを眺めることになった。モノローグ（独演）のように見えるその動きは、のこぎり二との共演から生まれたものに違いない。

アーティストは、見えないものを見せてくれる。マレビトも同じだ。身近にありながら見ていなかったのこぎり二の“からっぽ”をあらためて気づかせてくれたという訳か。



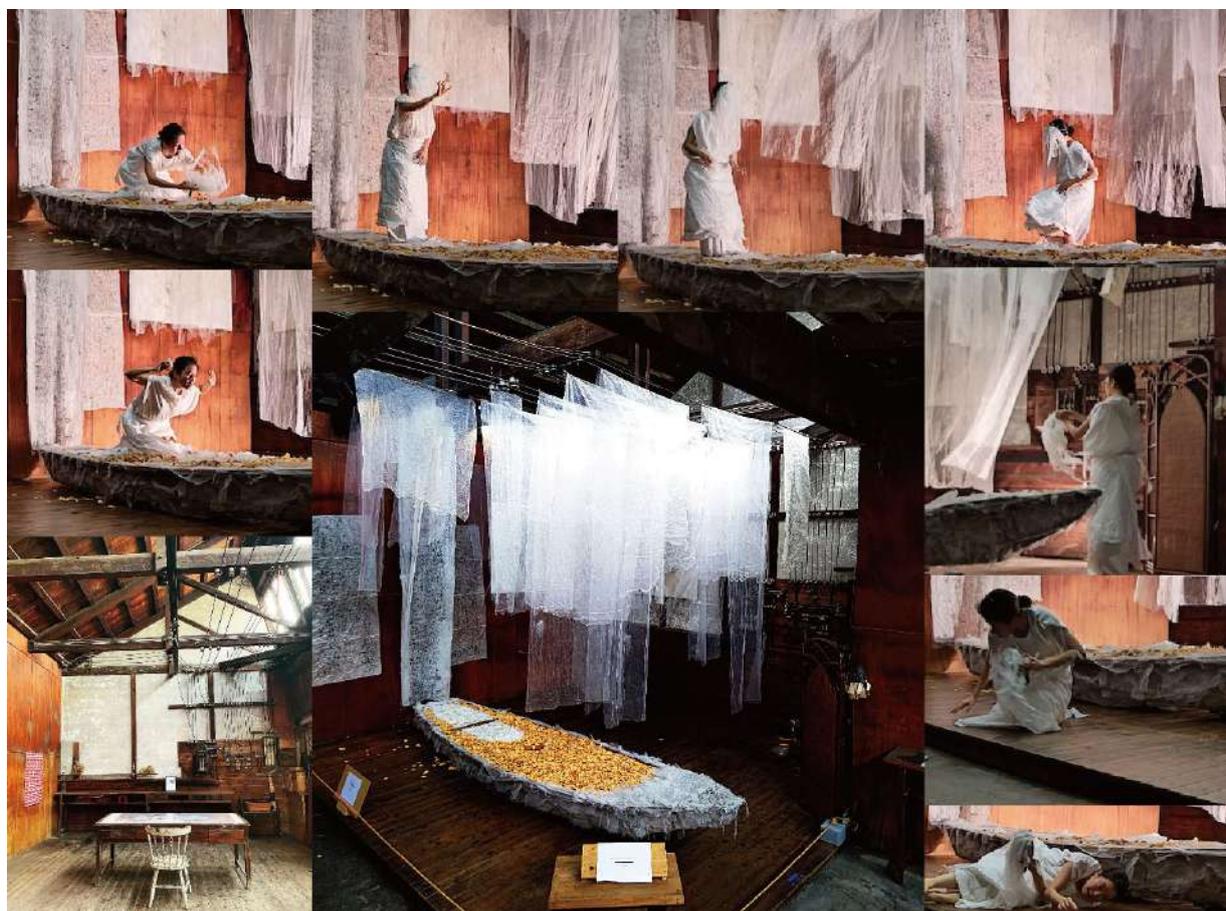
▲ “からっぽ”の中に生まれた“からっぽ”

## 2. 「それぞれの世界（環世界）」の重なりの中で

宮森敬子さんの作品を舞台にして第二幕の始まりである。二人のアーティストの共演である。和紙の細片で覆われた小舟の中にバラの花弁が敷き詰められている。死のイメージを喚起するモチーフである。多くの木々が拓本された薄い和紙が天井から吊るされ、僅かな空気の流れに揺れる様は、深遠な世界を現出させる。作品の鑑賞者は、小さな“からっぽ”の舟に身を横たえ、目を閉じて、1000年の時間を瞑想することになる。

樹拓された和紙の揺らぎに、時間の流れ、空間の変化を感じる。その中で、マレビトにも先ほどとは異なる動きが見えてくる。時折、速い動きがあったかと思うと、しゃがんだり、床に身を横たえる。動物を真似るような動作も見られる。先ほどとは違って狭いエリアの中で、さまざまな動きが展開される。

二人のアーティストの共演に見えるかもしれないがそれだけじゃない。ここで制作するアーティストは、まず、地域との関わり方を問われる。ここで創作することの意味を問われる。それは、アートスペース mhproject を主宰する林さんとの対話から始まる。だから、3人のアーティストの共演でもある。いや競演だな。さらに、この舟を通して、多くの環世界が関わっている。途中で観客の中に入っていった。舟に乗った命だけでなく、観客のお前たちを含めて、それぞれの世界（環世界）を重ねることを試みたのかもしれない。己を表現するというよりも、自らを“からっぽ”にすることで。そうしてポリフォニー（polyphony：多声音楽）な空間を創出した。それは、単なる融合ではなくて、一緒に創造する行為を通して得られるものだろう。



▲ 環世界の中で“からっぽ”になる

### 3. 大きな“からっぽ”から生まれる未来

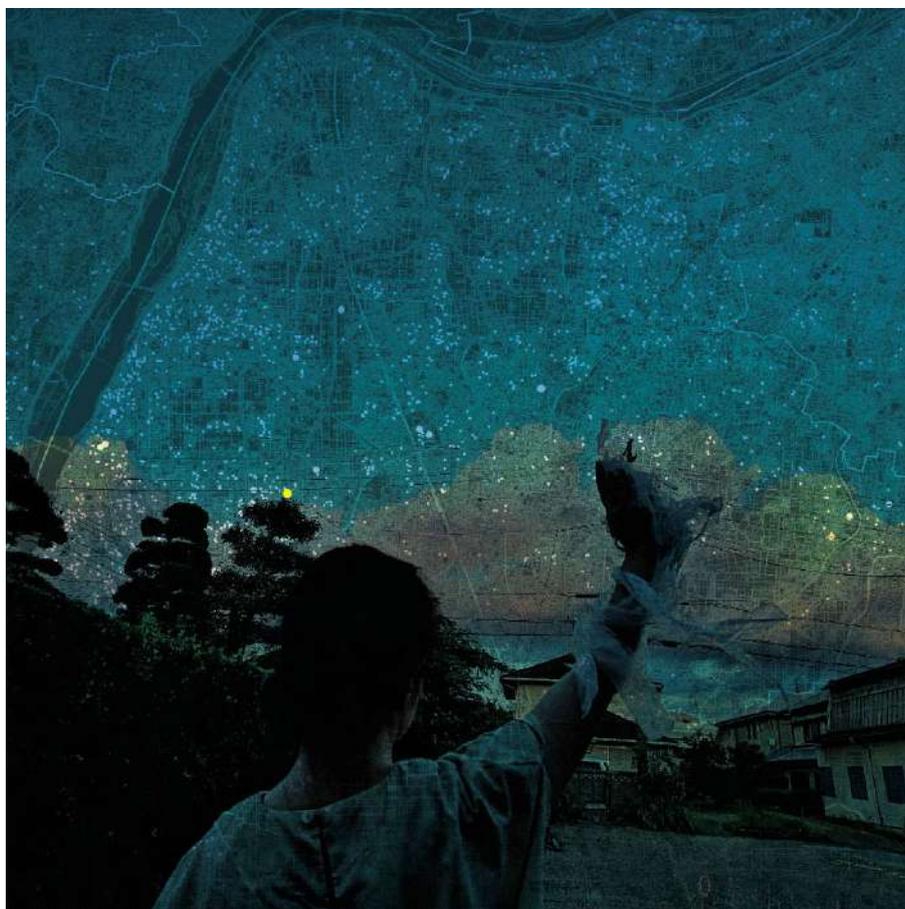
mhproject の競演空間から、二台のシオンヘル織機の置かれた展示スペースに移動して第三幕が始まった。シオンヘル織機は、この地域が最も元気だった時代を象徴している。マレビトは、仮面を上にかざし、発声しながら舞う。それが歌となって鳴り響く。第一幕のゆっくりとした動きから、第二幕では動きにバリエーションが加わり、そしてスピードが加わった。「序・破・急」の構成だろうか。そして、再びゆっくりとした動きとなり、うずくまる。ガチャ万景気とその衰退を見ているようだ。やがて、マレビトは立ち上がり、のこぎり二の大きな開口部に向かう。何かを見つけたのだろうか。そうだ、大空だ。そこには、宇宙という大きな“からっぽ”が見える。

遠い昔、この地域の私たちの祖先は、稲作技術を携えて、はるか西方から海を渡り、瀬戸内海に入り、東方に進み、伊勢湾に辿り着くと、四通八達する河川を遡上していった。そして、適地を見つけて上陸し、住み着き、先住民と融合し、ムラをつくり、クニをつくってきた。舟は、多様な環世界の往来とともに、私たちの住む大地創造の物語（「ノコギリヤネのある風景・その11」）を運んでくれるメタファーでもある。

私（ム）が開いて（ハ）、公になる（「ノコギリヤネのある風景・その14」）。

マレビトのように、仮面を外して私を開く。そうだ、今をここで生きるために、大きな“からっぽ”のキャンバスにそれぞれが自分の物語を描けばいいんだ。

さあ、マレビトを交えた“饗宴”が始まる。「のこオニ、お前も降りて来ないか」



▲ “からっぽ”の宇宙に描かれるノコギリヤネ群星座

#### 4. 夢千夜「舟に乗る」

こんな夢を見た。

森を彷徨い、大きな川の辺りに出た。小さな手づくりの舟が一艘。傍に老人が座っている。この舟に乗れば、千年の命を得られるという。ワシはもういい、お前にやるよ。千年後の未来見たさに、舟に乗り、川の流れに身を委ねた。横になると眠くなってきたので、目を閉じた。

赤ん坊の誕生を祝う人たちが見える。なぜか、その赤子が私だとわかる。父、母、姉、兄がいる。やがて、その子は大きくなり、平凡な一生が流れていく。走馬灯とはこんな感じだろうか。そして、ベッドに横たわっている。ああ、もうじき死ぬんだな。そう思ったら目が覚めた。あの老人の声が聞こえてきた。

これは紙に写し取られた未来だ。お前には、もっとたくさんの夢が必要だな。

また、目を閉じた。花卉が敷き詰められた小舟に横たわった私を虫や鳥たちが食べている。やがて、私は土になり、大地に戻った。大地に落ちたどんぐりから芽が出て大きな樹になった。一千回以上のたくさんの夢を見た。しかし、いつになったら人間に戻れるんだ。人間じゃなければ、千年生きて意味があるのか。そう思っていたら、目が覚めた。小さな舟はいつの間にか大きな船になっていた。方舟か、いや宇宙船だろうか。その窓を通して森が見える。なぜか、その森が私だとわかり、安心した。私は全体との関係性の中で生きている。

「1000年はまだ来ていたんだな」とこの時始めて気が付いた。



▲ 宇宙船のこぎり二号から見た未来

○エピローグ：始まりの三角形（縁起的世界の始まり）

宮森敬子さんの「1000年生きた私—環世界の中で」は、太平洋戦争末期、一宮空襲（1945年7月28日）の焼け野原に残った地蔵寺の一本のイチイガシのリサーチから始まり、石刀神社で樹々を拓本し、のこぎり二に森を創出した。これは、のこぎり二、地蔵寺、石刀神社が描くきれいな三角形から始まった物語かもしれない。

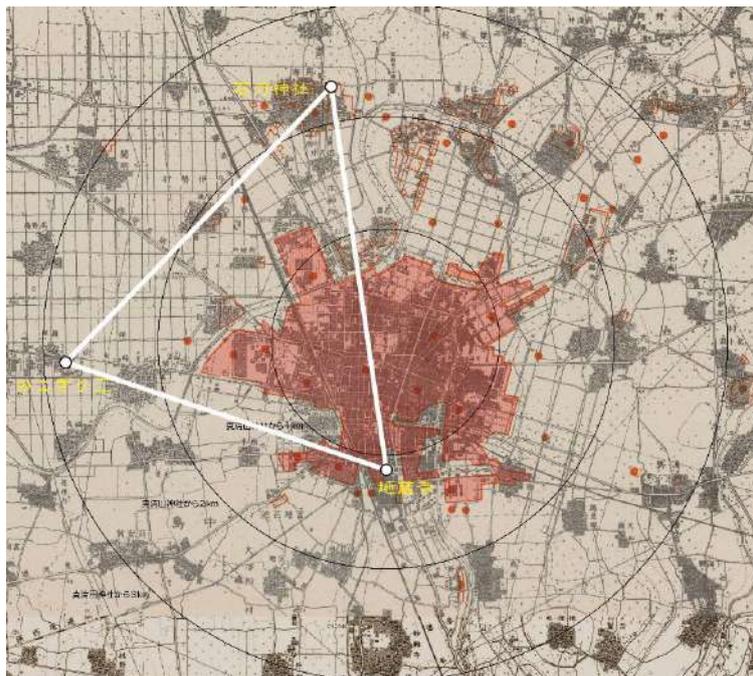
私は、石刀神社を産土神とする共同体に生まれて育った。私の環世界が、宮森さんの作品に重なってくる。かつて“人さらい”の出ると言われた石刀神社の鎮守の森は、半世紀経ち、サギ（詐欺？）のコロニーとなり、私たちの環世界と対峙する。

宮森さんが試みた環世界のアプローチは、尾張北西部に多くの神社や寺社が残っており、多様な生命による環世界である森の存在をあらためて気づかせてくれる。私たちは、人間だけでなく多くの生物を含めた全体との関係性の中で生きている。それは、地域の歴史、文化を資料や文献から知識を得るだけでは本当はわからない。舟に横たわり、目を閉じて、1000年の時空に身を委ねるといった身体的な行為に大きな可能性を感じる。

mhprojectを主催する林さんは、今回、中村愛音さんというパフォーマンスアーティストを招来した。3人のそれぞれの環世界の重ね合わせから生まれるもの。それは、単なる調和、融合ではなく、自立した主体が輻輳するポリフォニーである。mhprojectの”からっぽ”は、地域が真に持続する社会を築いていく上で、アートの可能性を見せてくれる。アーティストの独自のリサーチが、ここだけの地域で成立するかもしれない未来の可能性を広げてくれる。

そして、パフォーマンス終了後のアーティストを交えた“饗宴”。地産のスイカをいただいた。アートの地産地消。そんなフレーズが浮かんだ。いや、地産地生だろうか。独自の地域のリサーチから始まるアートが地域を再生する。

2023.8.23（立秋を過ぎ、処暑とは名ばかりの猛暑の中で）



▲ 物語の始まりの三角形（赤色が1945.7.28 戦災エリア）